

タブレット「いつでも会える」

コロナ禍の病棟

2年近く続くコロナ禍では、多くの病院や福祉施設で入院患者や入所者への面会が制限された。終末期の患者を受け入れる緩和ケア病棟では、残された日々を家族や友人と分かち合えない孤独感は深いという。エバーノート日本法人元会長で、経営コンサルタントの外村仁さん(58)＝甲佐町出身、米サンフランシスコ在住＝は、1人1台のタブレット端末を使った「オンライン面会」を提案する。「10月に見送った母とも毎日会話を交わすことができた。デジタル技術が、患者と家族をつないでくれたと話す。



病室で母の光子さん(中央)と面会した外村仁さん(左)。ベッド脇にタブレットを設置した＝熊本市東区(外村さん提供)

熊本市の病院 家族が提案 終末期の患者 生きる力に



病室のベッド脇に設置したタブレットに話し掛ける鶴田豊院長。家族は入院患者にいつでも話し掛けることができる＝10月、熊本市

外村さんの母光子さん(享年83歳)は6年間にわたり、全身に転移したがんを闘った。根治が難しくなり、4月に熊本市東区の鶴田病院の緩和ケア病棟に移ったが、コロナ感染拡大の波によって面会時間は左右された。当初は、同居家族のみ週1回15分の面会を許されたが、6月には家族も訪問禁止。7月に制限付きで再開され、9月には再度全面禁止。

個室で独り過ごしていた光子さんは、元気を無

くしていたという。「1つ容体が急変し、最期を迎えるか分からない。仕方ないこととはいえ、家族すら面会ができない状況が続くのはあまりにも寂しい。7月に帰国した外村さんは痛感した。外村さんは病院の許可を得て、病室のベッドのそばにiPad(アイパッド)とスタンドを設置。しかし高齢者にとって、タブレットの操作は容易ではない。手の骨にまでがんが転移していた光子さんは、手を動かして端

末やりモコンを扱うことは不可能だった。そこで注目したのが、iPadやiPhoneに初めから備わっているビデオ通話機能「FaceTime」。登録した人からの着信にだけ、自動で応答するよう設定した。家族がテレビ電話を掛けると光子さんは何の操作もせずに、すぐに顔を見合わせて会話ができるようになった。

「速いアメリカにいても隣にいるように話せて、違和感もなかった」と外村さん。もともとおしゃべり好きだったという光子さん。食べたものの話や、職員に言いにくいことも気兼ねなく話せた。北区に住む外村さんの妹も「1日に何度も話し掛けることができるビデオ通話は気軽で、満足度も高かったと話す。

家族との交流を取り戻した光子さんは、一時体調を回復させた。医師から、夏を越せないかもしれないと言われていたが「家族との毎日の会話で生活に張りが出て、生きようという力になったん

「家族との面会を諦めている人もいると思う。幸せな最期を迎えるために、できることがあると知ってほしい」

病院側にとってもメリットは大きい。鶴田豊院長(49)は「コロナ禍で面会の形が根本から崩れ、患者とその家族にどのような寄り添えばいいか、模索していた」。医療従事者も十分な心のケアができないことにシレンマを抱えていた。

同病院もオンライン面会の仕組みを整えていたが、面会のたびに、職員が日時を調整して機器を準備。当日も立ち会わなければならず、時間や回数も制限される上、人件費もかかる。

「触れ合っことは患者本人だけでなく、家族にとっても重要なこと。今の時代に合ったコミュニケーションツールとして積極的に取り入れたい」と鶴田院長。同病院では専用のタブレットを購入し、外村さんの協力で詳細なマニュアルを作成。家族の希望に応じて、職員が設定できるよう整備を進めている。

(志賀美里耶)